



学園だより

「伊賀祭 2010」開催!



伊賀祭実行委員会委員長
清中万理乃さん

季節の流れは早いもので、今年も伊賀祭の時期がやってきました。今年は11月20日(土)・21日(日)の2日の日程で開催されます。

43回目となる今回のテーマは「進化2010」。サブテーマが「夢にときめけ 明日にきらめけ ハジケロ伊賀祭」です。大学が創立20周年を迎えるということもあり、今までと違う一面を見せたい、つまり「進化」できたらという願いを込めています。

さて、今年も皆さんに楽しんでいただけるようさまざまな企画を計画しています。学生の日ごろの活動や学科の紹介などを見ることができる「学科ブース企画」はもちろん、美少女コンテスト、大山裕 LIVE など、例年とは違う企画を用意しています。また、模擬店を回りながら子どもたちも楽しめる「伊賀人を探せ」スタンプラリーもあります。

私たち実行委員会一同、皆さんに伊賀祭を楽しんでいただけるよう一生懸命準備を進めていますので、ぜひ伊賀祭にお越しください。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

プロコンサートのアーティストは「moumoon」に決定。ボーカル YUKA とギター 榎の2人組で、CM ソング「Sunshine Girl」が有名。聴き手を柔らかく包み込むライブを思う存分お楽しみください。
開催日時：11月20日(土)
午後4時30分開演(午後3時30分開場)
会場：順正学園第二体育館(吉備国際大学内)
チケット：前売券1,300円、当日券1,500円



■問い合わせ 伊賀祭実行委員会 (☎@1853)



「方谷橋」と「田井橋」が選奨土木遺産に



本町から落合町近似に架かる「方谷橋」と高倉町田井地内に架かる「田井橋」が平成22年度土木学会選奨土木遺産に認定されました。

これは、土木遺産を顕彰し、歴史的土木構造物を保存することを目的として、社団法人土木学会が平成12年に設立したもので、近代土木遺産(幕末～昭和20年代)を対象に、毎年全国各地20件程度の認定が行われています。

今年度は、昭和9年の室戸台風による災害復旧橋が次々に架け替えられる中、さまざまな形式の鋼橋が高梁川に一群として残っているとして、昭和12年に架橋の両橋と「井倉橋」(昭和11年架橋・新見市)が選ばれました。

10月17日開催の「とっとり防災フェスタ2010」(鳥取県米子市)で認定授与式が行われ、認定証と認定を記したレリーフが贈られました。レリーフは、各橋の高欄に取り付けられています。

■問い合わせ 建設課管理係(☎@0232)



現在ダム湖底になっている「笠神」(龍頭の付近)



笠神の文字岩のレプリカ

地名を歩く

七十二 笠神

「笠神」は、備中町西油野と平川の間を流れる成羽川の河谷で、備中町田原及び惣田から上流域にあって現在はこの峡谷をせき止めて田原ダムや新成羽川ダムができてきている地域で、「龍頭」といわれる地名でも呼ばれています。北側の備中町油野や南側の備中町平川には標高五〇〇m(六〇〇m前後)の吉備高原面が発達して、小起伏で多短谷の地形が広がっています。

この吉備高原は中新世末期(約五〇〇万年前)に形成されたといわれ、成羽川の河谷が深く高原を開削(高原面が侵食され谷が刻まれること)して、三〇〇m～四〇〇mぐらい谷壁が落ち込んでいて、成羽川の谷がV字の形に深くけずり込まれた峡谷で、穿入曲流(川がうねって曲流を繰り返していること)となっている場所なのです。地域の人々は峡谷が蛇行して流れる急流の様子を竜にたとえ、ここには竜が住むという伝説も生まれ、竜神信仰も伝えられて「龍頭」という地名にもなったのです。

山の斜面は四五度ぐらいの傾斜で新成羽川ダムの堰堤付近で谷の深さ五三〇m、山と山の峡谷の幅約一kmあつてせき止めるにはもってこいの場所なのです。備中町の生活面は吉備高原面が主で、底地と高原面の連絡路はすべて、若い支流の谷に沿った古くからの道でした。谷底の笠神地区はダムの湖底に沈んでしまい、住民は家や土地を捨てて転出したのです。

中世の人々は、狭くて急流であった「笠神」の難所に船路を開く工事をした記録を大きな安山岩質の凝灰岩に刻んで残しています。国指定重要文化財の「笠神の文字岩」といわれるもので、現在はダムの底にあって見えませんが、レプリカがダムの上の道路の脇に建てられています。日本の中世の河川水運開発記念碑としては最も古くて貴重なものなのです。

「笠神の文字岩」に書かれているのは、「笠神に、船路を造ったことを記す。この工事は徳治二年(一三〇七)七月二〇日に起工して八月一日平し終わった。笠神龍頭の瀬上下に連なる十余か所の瀬に船路を開くことは、日本無双の難所に工事することであるから薩埵の慈悲大王の(不明)懐を奉じないわけにいかない。そこで諸方に勧進すること一〇余か月にして遂にこの難所を平し得ることができた」と「龍頭上下瀬十ヶ所」とは、今の備中町小谷、田原間だらうといわれています。岩には「笠神」(龍頭)付近の難工事だった船路の開発について記されているのです。船路の開発の目的は、当時の備中北部や備後東城付近の鉄の輸送や諸物産の輸送路の確保にあったのです。「工事の発起人は四郎兵衛」という人で、大勧進は成羽にあった善養寺(今はない)という寺の尊海で、本山だった奈良西大寺の実専が来て奉行を務めています。そして石切大工は伊行経(有漢町の臍帯寺の

板碑、石幢の井野行恒と同一人物といわれる)だった」とあります。

近世になっても備後の国の鉄は、東城から成羽へ送られていきました。が、笠神付近は通船が不能となって、明和年間(一七六四～一七七一)には東城まで通船したが、すぐ廢路となっています。この頃の記録に「笠神難所之義、川渡にて通船難し成候得ば、右岩ヶ所之分瀬替御勝手次第御計ひ可被成候事」(明和五年(一七六八)東城・成羽総代・福地村庄屋十兵衛あての「一札の事」)「備中町史」とあるように、川渡では通船ができないうちも知れないので、その場合「瀬替」も勝手次第であると書いています。

寛政九年(一七九七)に当地を訪れ銘文を見た代官の早川正紀は文字岩の隣りの岩に所感や歌を刻んでいます。

備中町の「笠神」は付近を龍頭とも呼び、歴史的にも地形的にも日本でも有名な場所なのです。今では、ダムに水がたたえられ、V字谷で峡谷だった川の姿が違ってはいますが、すごい地形のところだったのです。

「笠神」という地名は「龍頭」と同じく、地域の人々は川や谷の地形の険しさを、竜にたとえたり、笠形の陽石にたとえて神秘な自然を見ていたのです。人間にとって不思議なものには信仰につながるから生まれた地名なのです。

(文・松前俊洋さん)

編集後記

「あつ晴れ!おかやま国文祭」が盛大に開催されました。出演団体や運営ボランティア、並びに関係者の皆さん、大変お疲れさまでした。そして、おもてなしの心で迎えてくださった市民の皆さん、ご協力いただきありがとうございました。神楽・漫画・童謡を通じ、高梁の魅力を再発見するいい機会になったのではないのでしょうか。

話題は変わりますが先日、有漢町からの取材の帰り、前方左側に、大きなリクガメを連れて散歩している女性を見かけました。見慣れない光景だったので、取材させてもらいました。今後も取材を通じて、皆さんに何か楽しい話題を提供できればと思っています。(29ページ「ミニミニトピックス」に掲載) (TM)